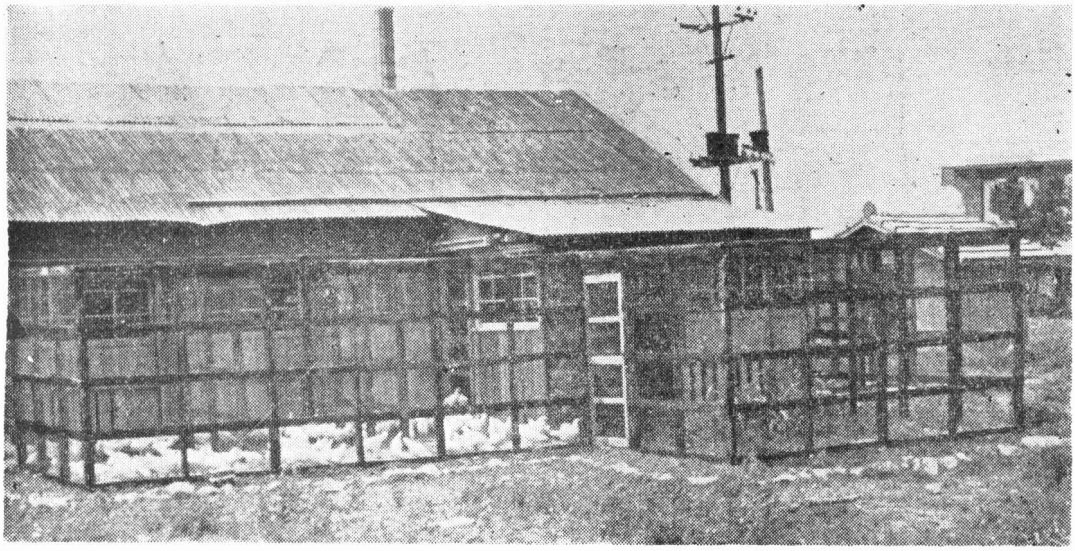
琉球大学学術リポジトリ

中ビナ・大ビナの管理

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-05-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松田, 祐一, Matsuda, Yuichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19658



種鶏として日本から輸入された本学部の中ビナ。

中ビナ・大ビナの管理

今月は中ビナ、大ビナの管理について書いてみたいと思います。中ビナと大ビナの区別は、人によつても違うのであるが、大体餌付（えさつけ）後一ケ月以上三ケ月迄を中ビナ、三ケ月から初産までを大ビナと云われている。

幼雛に比べて、中ビナ、大ビナは抵抗力が強くなつて死ぬことも少いのであるが、管理が悪かつたり、餌を充分に与えなかつたり油断して病気にかゝらしたりすると折角の雛を台なしにすることもあるので、細心の注意が必要である。

それでは、中ビナ、大ビナの飼養管理上重要な事項について考えてみます。

一、育雛箱から飼育室に移すときの注意

箱型育雛器で育てた雛も三十日頃になるとそろそろ広い部屋に移したり、或は中ビナバタリーに入れるわけであるが、その際、ヒナは環境の変化にびつくりし、又寒さ等のため、夜間ヒナの集団を吉り下積みになつた雛が一晩に何十羽も死ぬことがあり、或は死なくても雛の元気を無くし、病気の誘因ともなりかねないから、育雛箱から育雛室に移した時は、自温枠を設け、当分夜間は自温枠の中で、心地よく寝かすようにするがよい。又中ビナバタリー台に移した時には、寒いと思つたらバタリー台に麻袋等をかけて暖くするようにすることも大切と思われる。

二、雛の発育に応じて育雛室の適当な面積が必要である。何故かと云うと

イ、適当な育雛室の場合は、ヒナの発育をよくし均一な生育をとげさせる。

ロ、斃死率を少くし、しかも飼料を経済的ならしめる。即ち増体一〇〇匁当りの消費飼料を少くし飼料の利用効果を高める。

ハ、食羽癖、尻つゝき等の悪癖の発生を防ぐ。

二、新鮮な空気を与え夏の暑さを防ぐ。

それでは適当な面積とは、どれ程の広さかと云うと、廃温後育雛器から育雛室に移転してからの床面積は、体重四貫匁（一五キログラム）につき一坪の割で与えるようにすれば、大体適当な面積を与えることが出来ると云われている。

標準発育を考慮した一坪当りの適当な収容羽数は次のようであればよい。

日令	一坪当り羽数 白レグ	兼用種
三〇日	八〇羽	七五羽
四〇日	四七	四〇
五〇日	三五	三〇
六〇日	二七	二三
九〇日	一七	一四
一二〇日	一三	一一
一五〇日	一〇	八

中ビナバタリーに於ける適当な面積は

日令	一区二尺×一、五尺に於ける収容羽数	ヒナ一羽当床面積
二五—三〇日	九	三三平方寸
三〇—四〇	八	三八
四〇—五〇	七	四三
五〇—六〇	六	五〇

平飼い或はバタリ飼い、何れにしても、示された標準を一応念頭において、余りに密飼いに過ぎないようにすることが、丈夫なヒナ、揃つた産卵鶏を作出する上に大切かと考える。

三、中ビナ、大ナビの飼料

ヒナは日令と共に日に増えて大きくなつてくるのであるが、同時に餌を食う量もふえ、経済的負担も大きくなつてくるので、主人の方はびつくりして、ヒナの餌を制限して少く食わそうとする主人も居るわけである。

ヒナの食つた餌は先ずヒナ自体が生きるための養分即ちヒナの体温を保ち、内臓器官が活動し、新陳代謝を行い、ヒナが運動するためのエネルギー源生等に用いられるのである。若し食う餌の量が少いと、食つた餌は維持養分にのみ吊いられ、成長するための養分は少いわけであるから、ヒナは成長がおくれる。エサがもつと少くなればヒナは、だんだんやせてくることになる。だからエサを少く与えることは大変不経済なことである。

ヒナは、将来の産卵鶏の基礎を作つているのであるから、中ビナ、大ビナ時代は、出来るだけエサを沢山食わすように工夫することが飼料給与のコツであり、又エサも経済的である。

勿論、飼料中に含まれる養分は、蛋白質、炭水化物、脂肪、繊維、ビタミン、無機物等が、過不足ないように、含まれて居る必要がある。

アメリカ、ニユーヨーク州、コーネル大学教授ヒユーザー氏の飼料標準を示すと次の如くである。

1、蛋白質の含有量		
	エサ付後一一五週	一八一二〇%
	エサ付後六一一一週	一六一一八%
	エサ付後一二週以後	一四一一六%
2、脂肪含有量		四一　五%
3、繊維含有量		五一　七%
4、無機物含有量		
	カルシウム	一、〇一一、五%
	燐	〇、五一〇、八%
		(飼料一ポンド中)
5、ビタミン含有量		
	ビタミンA	一、四〇〇國際単位
	ビタミンD	九〇一一八〇國際単位

炭水化物の量は示されていないが鶏は、普通腹一杯、エサを食わしておけば炭水化物に不足することはない。

中ビナ、大ビナ時代に蛋白質をやり過ぎると、性成熟が体の発育より早くなり易い、その結果は、一二〇一一三〇日頃、体重にして一、三〇〇瓦(三三〇一三四〇匁)内外の小軀で、初産することになつて小さい卵を産み、いつまで経つても、標準卵量に達せず、廃鶏も多くなり勝ちである。それで此の期間に与えるエサは粗蛋白質の含量を一五一一六%位にし、これ以上にしないように注意したい。

体が不充分な割に、とさかが伸び間もなく初産すると思われるものに対しては、魚粉をへらし、その分で大豆粕や穀類を増し、広い運動場に放して十分運動を、とらすのもよいと云はれる。

日々に与えるエサの分量は次のようでよい。

週令	白レグ一羽一日量	兼用種一羽一日量
三週	一九グラム	一九グラム
四	二六	二六
五	三二	三四
六	三七	四〇
七	四四	五〇
八	五一	五六
九	五八	六四
一〇	六四	七〇
一一	六七	七三
一二	六九	七七
一三	七一	八一
一四	七四	八三
一五	七七	八六
一六	八〇	九三
一七	八三	九七
一八	八六	一〇二
一九	八九	一〇六
二〇	九一	一一〇
二一	九四	一一〇
二二	九七	一一〇
二三	一〇四	一一五
二四	一一二	一一五

それでは中ビナ、大ビナの標準体重は、いくら位であるかを示すと、

日令	白レグ	兼用種
三〇日	二四〇瓦	二五〇瓦
四〇	三六〇	三八〇
五〇	四三〇	四九〇
六〇	五五〇	六五〇
九〇	九〇〇	一、一〇〇
一二〇	一、二〇〇	一、四〇〇
一五〇	一、四五〇	一、八〇〇

四、日光を充分に利用する

日光は天与の貴重な栄養剤であり、又強力な消毒剤である。ヒナの発育には直射日光とくに紫外線が必要とされる。ヒナが紫外線に当たると皮膚に於てビタミンDが作られる、此のビタミンDはカルシウムと燐の吸収を調節し、骨の石灰化に必要なもので、不足すると発育がおくれてくる。

普通緑餌中には、ビタミンA、B、C等が豊富に含まれているが、ビタミンDは含まれていないからヒナに直射日光を当てゝ、ビタミンDを作らすことを忘れてはならない。ヒナに日光を当てない場合は肝油のようなビタミンDを含んだものを与える必要がある。飼料の一ポンド中、一三五國際単位のビタミンDを含むように配合すればよいと ヒユーザー教授は言つている。こうした理由から直射日 光は努めて利用することが望ましいが、孵化後一週間以内の雛に対しては、刺戟が強過ぎて有害となることがあるから、徐々に日光に当てゝ行くようにするヒナを運動場に出し充分日光浴をさせる時期は、陽春の候で孵化後三週目からである。

五、換　気

新鮮な空気は、日光と共に貴重な、しかも無料の餌である。保温にのみ専念し、悪臭を放つような育雛舎では、ヒナをすくすくと伸ばすことは出来ない。換気はガスを排除し新鮮な空気を与えるだけでなく、室内を乾燥させ又ヂフテリー等の予防にもなるから、沖縄のような暖地では、年中鶏舎窓の開放がよいと思われる。(但し盗人に用心)。

室内の清潔、えさの給与回数、とまり木等まだいろいろ考えるべきこともあると思はれるが、中ビナ、大ビナの育成上大事と、われる、栄養と育雛室の大きさについて書いた次第です。よい鶏よい管理、よい餌で、よい利益をあげましよう。

(松田　祐一)